

■島田清次郎 小説家。「地上」でデビュー、文学青年のカリスマになるも、傲岸不遜で文壇から排除、精神が破綻し夭折した。

しまだせいじろう

Bushidou・1899=

石川県石川郡美川町で、回船業営む常吉・みつの一人っ子に生まれる。

前年に北陸線美川駅が開業、繁栄誇った回船問屋と花街が急速に衰退してゆくなか、

田中正造直訴1901= 2歳： 父常吉が海難事故で死去、

母みつは、生活のため、飲み屋兼宿屋を営んでいたが、うまくいかなくなり、

日露戦争始・1904= 5歳：

姑里せ死去したのを契機に、家を売って、父西野八郎(つまり祖父)の経営する、金沢の西廓の一流の貸座敷(女郎屋)〔吉米楼〕の一室に移る。性的に早熟だったようで、様々な刺激を受けていったと考えられる。

日露戦争終・1905= 6歳：

10歳年上の室生犀星も卒業生だった、近くの野町尋常小学校に入学。

ワラキ創刊・1908= 9歳：

学校では成績優秀で級長を務める優等生の一方、家庭では甘やかされて放縦な生活という二重性、

大逆事件判決1911=12歳：

首席で卒業し、県立金沢第二中学校入学、弁論大会があると必ず登壇、教訓的な演題を情熱的な語り口とジェスチャーで、会場を圧したという。2つ上の第二高女の生徒を熱烈に恋し、のち「地上」のヒロインに。

明治天皇没・1912=13歳：

米相場に手を出した祖父が多額の借金を抱えて、再び窮乏するなか、才能を惜しみ自らの後継にもと煮えた実業家岩崎一(桜新町開発事業者)の庇護を受けて、白金の明治学院普通部2年に編入、なお優等生で演説も得意、すぐに全校演説会で一等になる一方、キリスト教の礼拝や聖書の講義などに感銘を受けるが、

大正政変・1913=14歳：

この間、岩崎一は母みつも女中頭に迎えてくれたが、うまくゆかず、密かに、浅草の鼻緒職人と再婚させられたことを知ってショックを受け、衝突。金沢に戻って第二中学校に復学、伯父西野八次のもとに寄寓。

第一次大戦始1914=15歳：

学資の余裕が無くなった伯父の勧めで、卒業すればすぐに稼げる県立金沢商業学校本科1年に転校させられると、学力レベルの低さに心が荒み、傲慢さが強く表れるようになる。弁論大会で学校を批判して停学処分。親友橋場忠三郎の影響で政治家志望から文学に転じるとともに、教えられたドストエフキーに傾倒、同人誌「潮」に処女作と思われる「若芽」を掲載、

21ヶ条要求・1915=16歳：

*富山房(学生)に「真紅の灯」を投稿して1等になり、大日本雄弁会講談社(雄弁)の「公娼廃止」をテーマにした懸賞大討論会に応募して佳作になるが、成績は悪化し落第、弁論大会で文部省を攻撃して、ついに退学。自活すべく、金沢の株式取引所に就職し証券新聞に小説を連載、室生犀星にも毎週届けるも続かず、再婚した母を頼って上京し、職を転々、

民本主義・1916=17歳：

母が離縁されたため、母子で金沢に戻り、極貧生活。〔萬朝報〕懸賞小説に入選し、十円の賞金。近くの明達寺の住職で宗教改革先鋒の暁烏敏を訪れるようになり、書庫の膨大な蔵書を読み漁って、目が開き、

ロシア革命・1917=18歳：

初の長篇で母との愛憎示す自伝的小説「死を超ゆる」を執筆、暁烏敏の推薦で〔中外日報〕で連載開始も、社の都合で中断、たまたま読んでいた若き日の大熊信行から問い合わせが来て喜び、以後、文通、

本格政党内閣1918=19歳：

その後〔中外日報〕社主真溪涙骨はたびたび小品を載せてくれたが、ニーチェの全集を読んで感動、翻訳者生田長江の名を知るなどするうち、母が大病を患い、ますます苦しくなるなか、自信「地上」に着手、母の回復後、伯父の紹介で鹿島郡役所書記補となり解放感を味わいながら執筆を続けるうち、高給で〔中外日報〕記者に迎えられる、京都に転居するが、傍若無人ぶりが嵩じて、同僚の女性記者から集中砲火を浴び、

ベルリン条約・1919=20歳：

*退職に追い込まれるが、「天才」でありたい強い意志と、「狂人」になることへの強い不安を表した長詩「自分への説法」後、またも涙骨に支援されて上京。「地上」の原稿を、まず同郷の先輩室生犀星、徳田秋声に見せるも無視され、前年文壇に登場したばかりの加能作次郎とは友人になり、大熊信行が訪ねてきてくれたりするうち、ちょうど上京していた〔中外日報〕主筆の伊藤証信に再会、生田長江を紹介してくれ、早速訪問、日参の結果、ようやく読んで感激した生田が紹介してくれ〔新潮社〕に持込むと賛否両論であったが、社長佐藤義亮の決断で「地上第1部 地に潜むもの」が刊行され、生田と堺利彦らの絶賛で大ベストセラーとなる。

大暴落・1920=21歳：

便乗で「早春」「大望」刊行。スペイン風邪で入院。祖父八郎が死去。続いて「地上第2部 地に叛くもの」刊行。有頂天になって傲慢さまるだし、なお生活が苦しいなか助けてくれた中山忠直、文学界に導いてくれた橋場忠三郎という二人の友人を一気に失い、堺利彦・大杉栄らによる日本社会主義同盟に加盟すると、堺利彦の娘真柄に結婚を申し込んで、堺利彦から拒絶されるも、鬱屈する若者たちのカリスマ「島清」となり、

原敬首相暗殺1921=22歳：

鶴沼に転居。「地上第3部 静かなる暴風」、戯曲「帝王者」刊行。全国を、生来の演説のうまさで講演旅行、

水平社結成・1922=23歳：

「地上第4部 燃ゆる大地」、作品集「勝利を前にして」、戯曲集「革命前後」刊行。〔島田清次郎氏文芸大講演会〕が神田の基督教青年会館で開かれるに至る。山形の素封家の娘でファンレターを送って来ていた小林豊に一歩的に申し込んで結婚(入籍はせず)するも、DVの限りで、「世界認識の外遊」の欧米旅行に出発すると、太平洋上で外交官夫人に接吻を迫ったという記事が新聞に掲載され、妻豊は家を出て2度と戻らず。それでも、日本を代表する作家として、ロンドンで島田清次郎歓迎晩餐会が開かれ、H・G・ウェルズも出席しスピーチを行ってくれるなどして、帰国。

関東大震災・1923=24歳：

代々木富ヶ谷に家を建てる。「我れ世に勝てり改元第1巻」刊行。海軍少将令嬢で、かねてファンレターを送られ文通していた舟木芳江を誘拐監禁したとの容疑で拘引され、大きなスキャンダルとなり、舟木家から、強姦・強盗・誘拐・不法監禁などの罪名で告訴される(この時、〔雄弁〕の懸賞大討論会応募作品に高得点をつけてくれた審査員大井静雄が弁護人に)。舟木家は逆バッシングを受けて告訴を取り下げるが、その後出版社からの注文が一切なくなった上、大地震で自宅が倒壊、以後、母のいる金沢と東京を往復する生活。

護憲三派圧勝1924=25歳：

長篇「我れ世に敗れたり」が〔春秋社〕から刊行される。芳江に会うため舟木家を訪れるが門前払いされる。北陸線車内で車掌を殴打。徳田秋声、吉野作造、菊池寛ら知り合いの作家の家を訪ねて強引に宿泊するうち、*ついに、真夜中に、巢鴨の路上を人力車で通行中、不審人物として警察に連行される。精神鑑定の結果、早発性痴呆(統合失調症)と診断され、巢鴨の私立精神病院(保養院)に収容。

治安維持法・1925=26歳：

外遊時ニューヨークで意気投合し、帰国したばかりの木村秀雄・駒子夫妻が来院した上、退院に奔走してくれ、話題の人物として新聞記者らの病院訪問記事も多く、文壇からの抹殺に、当の菊池寛のほか、横光利一ら同情や共感を示す作家もいたが、それ以上にならず、徳富蘇峰に宛てて退院嘆願の手紙を出し、

日本時代始・1926=27歳：

清次郎と舟木芳江をモデルにした映画「女性の戯れ」が公開される。

金融恐慌・1927=28歳：

政治家や検事に宛てた退院嘆願の葉書を大量に書くも病院側に無視されるなか、創作意欲は衰えず、

共産党事件・1928=29歳：

雑誌「悪い仲間」に清次郎の詩が発表される。

世界恐慌・1929=30歳：

〔文芸ビルデング〕掲載の「明るいペシモストの唄」が最後の詩になり、最後まで母離れできないことを示す

海軍軍縮条約1930=31歳：

*長篇小説「生活と運命第1巻 母と子」を完成させ、エッセイ「雑筆」を最後に、肺結核により、没した。

のち、未発表の草稿25編が発見されている。